

氏名	坪田（中西） 美貴
職位	COE 研究員
<p><b>研究概要</b></p> <p>1895 年から 1945 年までの間日本の植民地であった台湾において、先住民女性はいったいどのように統治者である日本人と向き合ったのかを問うことが研究課題であった。</p> <p>2009 年 6 月に台湾学会で発表した研究では、衣服の選択という観点から、統治というものがいったいどのくらいの浸透性をもっていたのかを考察した。対象となったのは統治者側の衣服である和服、被統治者である漢人系台湾人の衣服である台湾服、そして先住民固有の衣服である。先住民はもともと衣服を自分たちの手で作っていたが、そのような自給生活に貨幣経済が入り込むことで、衣服を購入するという選択肢が生まれた。一般に日本統治下において和服の着用は、同化政策や皇民化運動の脈絡で語られるため、和服を購入し着用することは、統治力がより浸透しているとみなせるのではないかと考えた。しかし先住民女性による和服の着用は、時に戦略的な選択であることが分かった。また台湾服についても、それが日本人の衣服との対抗から選択したというよりは、モダン、ハイカラといった、むしろ近代的と思われたゆえの選択であったことが明らかになった。ここからは、和服の着用イコール同化政策や統治力の強さを読み取ることはできないということが明らかになった。</p> <p>2009 年 11 月ジェンダー史学会において、次世代研究ユニットの助成を受けた研究の成果を発表した。シロハンケチという狩猟による占いを行う先住民社会集団ガガは、この狩猟を行い得るという意味で、統治者側と「対等」な関係を結び、その限りで両者は「公共圏」として存在できた。それは女性の意思を無視することで成り立つ関係性でもあった。だがそのなかにあって女性は、ガガという「親密圏」内に「安全」に留まりつつ、シロハンケチを行う理由となった日本人男性からの欲望のまなざしを受け止め、主体化していた。つまり、ガガとは女性にとって束縛の場でありつつも主体を形成しうる可能性の場であったことが明らかになった。</p>	
<p><b>業績リスト</b></p> <p>&lt;論文&gt;</p> <p>単著「帝国と民族の間で — 日本統治初期の台湾における『化蕃婦』という生き方」『ジェンダー史学』ジェンダー史学会、第 5 号、2009,10.20、67-79 頁。</p> <p>&lt;発表&gt;</p> <p>単独「統治の浸透性の不均衡さがもたらすもの — 台湾先住民の植民統治経験から」日本台湾学会第 11 回学術大会、2009.6、於日本大学。</p> <p>単独「日本統治後期の台湾先住民社会における公共圏と親密圏、そしてジェンダー — 『シロハンケチ』を手がかりとして」ジェンダー史学会第 6 回年次大会、2009.11、於立教大学。</p>	